



今月のミニ展示コーナー 解説シート

【 展示のテーマ 】 天神台遺跡 ―その後の調査研究成果―

天神台遺跡は、およそ 7,000 年前に作られた、市内では唯一・最古の貝塚遺跡です。この遺跡については、一昨年に「遺跡発表会」そして昨年は「特別展」でその内容をお伝えしましたが、さら昨年一年をかけ、古墳の下層などからみつかった多量の遺物を調査しました。

天神台遺跡の上には、およそ 300 基の古墳からなる「諏訪台古墳群」があります。現在、この遺跡については、調査報告書を作るための作業が続いていますが、その過程で古墳の盛土中や周溝、墳丘下から多量の縄文時代遺物がみつかりました。その数は整理箱でおよそ 350 箱と膨大な量でした。天神台遺跡の調査報告書刊行から一年の時間をかけ、その内容を調査しました。ここでは、その成果の一部を速報いたします。

＜羽状縄文系土器・関山式の優品＞

器面全体に複雑な縄目を施し、洗練された器形と文様モチーフが特徴の土器です。およそ 6,000 年前の縄文前期のものです。天神台遺跡では、およそ 7,000 年前の早期の土器と並んで多量にみつっていますが、この土器のように口縁部から底部まで揃ってみつかったものはありませんでした。その出来映えも素晴らしく、まさに関山式土器の「優品」です。



関山式土器

東海東部の土器

近畿・北陸の土器

＜よそから来た土器＞

土器に付けられた文様や器形、そして胎土（土・砂・石など含有物）の様子や焼き具合が明らかに地元のものと異なる土器がみついています。これらはほとんどが破片で、量もそれほど多いわけではありませんが、遠隔地との交流や人の移動などを考えるうえで重要な証拠となります。東海東部、東海西部などの土器は既にみつかったいましたが、今回新たに近畿・



北陸に分布の中心がある土器もみつかりました。

＜天神台ムラ以前・以後の人びと＞

天神台遺跡のあった 15 万㎡にもおよぶ広大な台地上には、二つのムラの時期である「早期後葉」と「前期前葉」以外にも、多くの土器がみつかり、人が暮らした「痕跡」がみられます。その期間は、早期の初頭から晩期末までと、実に 7 千年以上の長きにわたります。しかし、いずれの時期も住居跡など明確な「遺構」はみつかっておらず、早期後葉や前期前葉のようなしっかりとしたムラは作られなかったようです。台地の縁辺にあたり、西側と南側に視界が開けた高台の適所であり、現在でも国分寺台の住宅地の中心部の一画にあたる「住まう」には絶好の場所です。なぜこの場所は 6,000 年前以降、人が大勢集うことがなくなってしまったのか、その理由は定かではありません。3,500 年前くらいになると、国分寺台のやや奥まった箇所には祇園原や西広など、大貝塚をとまなうムラが作られます。住まいの場所選びには、環境の変化（海との関係等）、物資の交易ルートとの関係、そして先住民の痕跡があるか否かといった場所に対する「意識」などが関わっていたのかもしれません。

＜謎の石製ペンダント＞

大きさ 8.9×4.0cm、材質は滑石製、両先端がやや尖り扁平なカタチ、表面には線刻と両端に計 4 箇所の穴があけられ、おそらく「ペンダント」に使われたものとみられます。みつかった場所は、037 号古墳の主体部にあたることから、被葬者の副葬品として供えられたものかもしれません。しかし、その「つくり」は極めて縄文的で、古墳時代の人びとの好みとは少し違う気がします。天神台遺跡で第 2 のムラがなくなる前期後半には、石製の耳飾をはじめペンダントなど多彩なアクセサリーが流行し始めます。天神台遺跡からも、この時期の石製耳飾や土製耳飾が幾つかみつかったので、「謎の石製ペンダント」が本来は縄文人のものであった可能性があるかとみています。

